

エイジレスでジェンダーレス キラキラと光り輝くエルトンがここに

INTERVIEW 音楽評論家・作詞家 湯川れい子氏

全世界でのアルバム売上総数が3億枚以上に達するレジェンドであり、比類なきシンガーソングライターとして幅広い世代からリスペクトされるエルトン・ジョン。その待望の新作は、才能あふれるミュージシャン・作曲家であり、11回のグラミー賞受賞実績を持つブランディ・カーライルとのコラボレーション・アルバムだ。LGBTQ関連のチャリティーなど、社会貢献活動への熱心な取り組みでも知られる両者の意欲作について、ライブ体験やインタビューを通じてエルトンの人となりを知る音楽評論家の湯川れい子氏に語ってもらった。

使い捨てカイロを エルトンの背中に貼った

エルトンには素敵な思い出が2つあります。一つは1975年、ロサンゼルス老舗ナイトクラブ「トルバドール」でのライブを至近距離で体験できたこと。この公演はロサンゼルス中で評判になっていて、当日はジョニ・ミッチェルやリンゴ・スター、ポール・マッカートニーも客席にいました。ロックンローラーとしての彼の魅力を目の前で存分に堪能した、思い出深いコンサートです。

もう一つは95年、武道館の楽屋でインタビューしたとき。どうすれば彼の懐に飛び込めるだろうと考えて、思いついたのが使い捨てカイロです。話し始める前に「上着を脱いでもらえますか?」って伝えて、直接彼の背中に貼ってあげた

んですよ。「一体これは何?」ってびっくりしてましたね。「大丈夫、やけどはしないから。屋外のコンサートで使って」って一箱お渡しして。おかげでその後は互いに打ち解けて話げできました。

実は70年代にも電話インタビューの機会があったのですが、彼が「ハロー……」とひとこと言ったきり、いきなり切られてしまったんです。そのことを話したら、「あの頃の僕はアルコールやドラッグでどうしようもない状態だったんだ」って、顔を真っ赤にして謝ってくれました。

互いに肩を寄せ合って 生まれた名曲たち

新作の『天使はどこに』。エルトンとブランディ・カーライルが類と類、肩と肩を寄せ合いながらキラキ

ラと光り輝いているアルバムです。エイジレスでジェンダーレス——男も女も、年齢の差もなく、子供の頃からずっと一緒だったような可愛らしさときらめきに満ちた、今まで聴いたことのない音楽。私にはそんなふうに感じられました。1曲目の「ローラ・ニーロの薔薇」はイントロから引き込まれるし、続く「リトル・リチャードのバイブル」もすごく面白い曲。「ユー・ウィズアウト・ミー」はとっても優しい曲でホロリとしました。第97回アカデミー賞「歌曲賞」にノミネートされた「ネヴァー・トゥー・ライト」と先行シングル「天使はどこに」も誰もが愛さずにはいられない曲ではないでしょうか。

エルトンはこれまでジョン・レノンからレディー・ガガまで名だたる巨星たちと共演してきましたが、今回のコラボでは、ブランディがエルトン

の新しい魅力を引き出した部分も大きいでしょうね。そして、あのピアノ。私は常々、彼のピアノは「国宝」ならぬ「世界宝」だと思ってるんです。

70年に「ユア・ソング(僕の歌は君の歌)」が大ヒットして、エルトンは世界的なスターに上り詰めます。私がDJを務めていた「全米TOP40」というラジオ番組でも、当時はエルトンを毎週のようにかけていましたが、それからもう半世紀以上、彼のヒット曲を聴き続けてきたことになりすね。今回の素晴らしい新作に接して、また一つエルトンとの素敵な出会いが増えたような気がしています。

ゆかわ・れいこ 東京都出身。1960年、ジャズ専門誌への投稿をきっかけに音楽評論家としてデビュー。国内外の数多くのアーティストと交流を持ち、作詞家としても「ランナウェイ」「六本木心中」「恋におちて」など数多くのヒット曲を生み出している。

湯川氏が選ぶ
この一枚



Elton John & Brandi Carlile
Who Believes In Angels?
(2025)

邦題は『天使はどこに』。エルトンの長年のソングライティング・パートナーである盟友バーニー・トーピンも全面参加した話題作だ。「デュエットというよりは、エルトンとブランディが寄り添い合って斉唱している、そんな印象を抱かせてくれる名作です」(湯川氏)

Magical Pop Selection

Column by
土橋一夫



Sonnets for a Serviette

フォリン・コレスポンデント

最近音楽と言えばサブスクやダウンロードなどで聴くのが一般的になった。しかしその対極にあるアナログレコードやカセットテープも世代を超えて人気を集めている。そんな中で、たとえば海外ではデジタル配信でしかリリースされていない作品が、日本ではアナログで発売されるという例も時々見かける。今回ご紹介する作品もそんな時流を受けて、アナログレコードで発売されたものだ。

アーティスト名はフォリン・コレスポンデント。本作はオーストラリアのメルボルンをベースに活動する4人組メロウ・ポップ・バンドの3曲入り7インチ・アナログだ。通算2作目となるこのシングルは、鎌倉のblue-very labelと東京のADVANCE MUSICが手を結んで昨年12月にリリースした初の作品でもある。ブリファブ・スプラウト好きから支持され

る……という宣伝コピーを読みながら、実際に耳を傾けてみると、A面に収録の「Tea with Sugar」では優しい男女の歌声、そしてラテンからソフト・ロック、ソウルまで様々な音楽的要素が詰まったポップなサウンドに心が躍る。B面1曲目「Pacific Detailers」は一転してシャッフル・ビートが印象的。決して張らない歌声、そしてステイジー・ワンダーなどに通じる要素も散りばめられていて、音楽好きの心をくすぐる好楽曲だ。なおここにはmicrostarの飯泉裕子がコーラスで参加。ちょっとジャジーで今の雰囲気をつらなB面2曲目「Blues in C」も完成度が高い。ジャケットも美しく、こういう作品こそがフィジカル人気を支えるのだと改めて実感した。

とばし・かずお 音楽ディレクター/構成作家/アートディレクター/写真家。FLY HIGH RECORDS / Surf's Up Design主宰。レコード会社を経て音楽制作やラジオの分野で活動。K-mix『ようこそ夢街名曲堂へ!』(出演/構成/選曲)は24年目を迎え、渋谷のラジオ『さしはひろし』などでも構成作家・選曲家として活動中。著書に『夢街POP DAYS』『ジャケケイノススメ』など。



Rock Times Review

ラッシュ50
ラッシュ

プログレッシブな音楽性と、トリオ編成の常識を覆す卓越した演奏能力で、ロック史に不朽の名を刻むラッシュ。『ラッシュ50』は、その名の通り豪華ボックスセットに50曲を収録した、彼らの全キャリアを網羅する名曲集だ。ファンが何十年も

公式リリースを求め続けてきたラッシュ初のシングル「ノット・フェイド・アウェイ」「ユー・キャント・ファイト・イット」が新たにリマスタリングを施して収められたのははじめ、貴重な未発表曲を多数収録。さらにはスタジオ録音のレア音源や、5曲の未発表ライブ音源など、ファン感涙のトラックが目押しの内容となっている。日本盤は『ラッシュ50—デラックス4CDエディション』(輸入盤国内仕様)として、1500セットの限定リリース。他に4枚組CD+7枚組LPからなるスーパー・デラックス・エディションなど、輸入盤3フォーマットも同時発売されている。



キュリアス・ルミナント
ジェスロ・タル

2022年『ザ・ゼロット・ジーン』、23年『ロックフルーテ』と立て続けに新作をリリースしてきたジェスロ・タルが、前作からわずか1年11カ月のインターバルでニューアルバムを完成させた。通算24作目のスタジオアルバムとなる新作『キュリアス・ルミナント』は、彼らの特徴づけるフルート・ソロに加えアコーディオン、マンドリン、アコースティックギター、テナーギターといった楽器も登場。70年代後半に彼らが残した名作群を思い起こさせるアコースティックサウンドが聴ける、完成度の高い作品となっている。プロデューサーとミックスを手掛けた中心人物イアン・アンダーソンによるアルバム&曲目解説も付属(日本語翻訳付き)。日本盤は高品質Blu-spec CD2でのリリースとなる。

